



## 『だからあれほど言ったのに』

内田 樹 著

マガジンハウス 刊

定価 1,100円 (本体 1,000円+税)

著者は、混迷する現代を鋭く解剖する思想家。合気道などに練達する武道家でもある。多数の著作が書店のコーナーに並び、劣化する時代を軽妙洒脱な文体で斬り捌く手練れの警世家として知られる。

本書も各種メディアの依頼に応じて認めた時評や講演録などを再整理した「ウチダ流『日本人論』」の新刊である。第1部「不自由な国への警告」と第2部「自由に生きるための心得」の2部構成で、内外の現状に深く斬り込んでいる。その斬り込みは骨まで達するが、縦横無尽の太刀さばきがしなやかに飄然としている。

第2部の小見出し「ほんとうの意味での自立とは？」で哲学者・鷲田清一を評し、「そのつどの当意即妙の対応」と「手際の精妙さ」を指摘するくだりは著者自身にもあてはまる。「身体に深く内面化し、血肉化した」作法が、両者に通底する知恵

や技術である。

小見出しのいくつかを拾ってみよう。「『大人』が消えている～日本の危機」「アメリカの顔色をうかがう日本政府の悲哀」「『ダメな組織』の共通項」「『貧乏』と『貧乏くささ』の違い」「『シンガポール化』という都市一極集中」「憲法の『主体』とは誰か」「原爆に対する米国民の罪責感」「人生は『問題解決のため』にあるわけではない」「『愛する』ことより『傷つけないこと』」「わからないことはどんどん訊いたほうがよい」等々、いずれの言及も胸にストンと落ちて水際立っている。

数ある名言のひとつを本書の冒頭から引用しよう。「いくら年を取っていても、社会的地位があっても、物知りでも、その人がいるせいで周りの人たちの成熟が阻害されるなら、その人は『大人』としての役割を果たしていないので、私の定義では『子ども』である」。さて、あなたの場合はいかが？ さんかいの げん (山海野 玄)